
神隠しで異世界に

屋根裏の番人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神隠しで異世界に

【Nコード】

N9960W

【作者名】

屋根裏の番人

【あらすじ】

気が付いたら異世界にいた。死なない程度に異世界に挑む物語にしようと思ったらなぜか主人公が自爆した物語。
処女作です。

批判でもなんでもどんと来い。

異世界で魔法を（前書き）

友達に感化されて書き始めました。

異世界で魔法を

そう、俺はいつも通り学校へ行くはずだった。

朝いつも通りに起きていつも通りに準備を整えいつも通り玄関をくぐる。変わったことは何一つなかったはず。

だが、そこには廃墟の町があった……。

「は？　なんだよこれ家の周りは廃墟なんかじゃなかったはずだぞ」

俺は夢でも見ていたらしい。家を出たと思つてたのも夢だったらしい。

ありえねーだろ。家を出たら周りが廃墟とか。それに自分のいた家もいつの間になくなってるし。

こういう時落ち着くのが大切なはず。そう、深呼吸だ。ラマーズ法なんてベタな間違いは起こさない。

……ふう、落ち着いた。まあ、案外最初から混乱してなかった気がするけど。よし、とりあえずここが夢じゃないと仮定して、どうするか考えないといけないな。今いる場所は小さな町であつただろう廃墟。建物は崩れ、人のいる気配もない。建物は木でできているものや石を使ったものなどで壊れていなければ結構な大きさであつただろうものもある。

というかなんでここは廃墟になつたんだ？　雑草とかは生えてないし最近なつたような感じだけ。まあいいや、保留しとこう。

それと、場所もわからないから家への帰り方は分からない。まあ、

わかってても徒歩しか移動手段ないけど。あと人がいるのかもわからない。こんな状態じゃないと思うが。とりあえず雨風を凌ぐ所はあるから、食べ物でも探すか？

ああ、持ち物を確認しよう。幸い学校に行くためのかばんは持っているし。

「持ってきたものって言っても教科書にノート、筆記用具に携帯電話とか。教科書とノートは燃やすか？筆記用具は武器？携帯は……あ、携帯あるじゃんってやっぱ県外か」

まあいいや次は廃墟をまわってみるか、どこかわかるかもしれないし。

うん、まわってみたが入口らしきところの看板に書いてあった文字が知っているものではなかった。だがなぜか読めた。『エマルテ』たぶんこの廃墟の名前だろう。そんな場所俺は聞いたこともない。それに人はやっぱりいなかった。廃墟の周りは森だったが迷ったら困るので行かない。決して薄暗く、獣の唸り声が聞こえるのにびびったわけではない。

だが廃墟には使えそうなものはあった。まずは斧それにナイフも見つけた。斧は木の棒に長方形の刃がついてる木こりが使うような物でナイフは木を削ったりするような物だ。進むのに邪魔な木片を壊したりするので斧はとて有難かった。

次に木の棒。燃やすのよし。叩くのよし。杖にするのよし。の万能性。杖にしてるけど。

どっちも勝手に拝借した。だって人いないし。

そして雨風を防げる場所も見つけた。が食べ物はいくら探してもでてこない。食べ物がないとか……餓死だけはしたくないな。すぐ帰れる可能性も無いわけではないけど。

ここは廃墟だから人が来る可能性はないと思う。だから食べ物は森で探す必要がある。まあ、森は迷うのが嫌だからいかないし。

ああ、考え事をしてるともう暗くなってきた。燃やすものがあっても火がないとか。火をつけるものすら探しとけばよかった……。

「明かりが欲しいな。クソッ」

その瞬間目の前に小さな今にも消えそうなでも暖かな明かりが灯った。

「え……なんだこれ。もしかしてさっき言ったことが起きたのか？
じゃあ、明かり明かり明かり！」

その言葉に反応して闇を切り裂くような激しい光が目を襲った

「うおっまぶしっ！てかなんだこれ魔法か？　じゃあ異世界か？

ここ——

その瞬間俺は深い眠りに誘われ、固い地面を感じながら眠りについていた。

「ん？ なんだろ今の光。おもしろそうだし行ってみよっかな。」
『ライト』」

光の球を周囲に浮かばせた彼女は、鼻歌を歌いながらは森の中に消えていった。

「あれ？ なんで俺はこんなところで寝ているんだ？」

頭も痛いし道端で寝ていたからか体の節々も痛い。ああ、思い出した。気が付いたら知らない場所にいたんだった。それに魔法っぽいのが使えたんだった。

あれ？ もしかして神隠しにでもあつたのか？ 神隠しで異世界にご招待ってか。というか魔法が使えるとかわくわくしてきた。

「レッツ魔法が使えるか検証だな」

昨日は言葉をしゃべると使っていた。それに明かりを思い浮かべていた。ということはイメージを作って呪文？ を唱えればいいのか。

「よし。『自己治癒』そして『超回復』『成長』『促進』」

こんだけやれば体の痛みは消えて丈夫になつて治るはず。イメージはボディービルダー。でもマツチヨになったら即、見た目を元に戻す。絶対にだ。

くだらないことを考えていたら痛みがもうないことに気が付いた。

が、目に見えない魔法にしたから時間がたって治っただけかもしれない。次は目に見えるのにしよう……。

うーん。やばい思いつかないよく考えたら昨日小さな明かりがものすごい光になった記憶がある。

ということは火を出したらあたり一面焼け野原っていうことになる可能性もある。さすがに寢床を壊すのには抵抗がある。転移して人のところまでつていうのも体がバラバラになったら怖い。

異空間の倉庫つても引き込まれたら怖いし。俺はけっこうファンタジー小説が好きだったんだが定番のことができん。……………

錬金があるじゃないか。よしここは武器だろ。

魔法ときたら剣だ。

すぐに広場らしきところまで行きおもちゃをもらった子供のようにわくわくしながら呪文を唱える。

「『錬金』」

西洋の剣をイメージしたら両刃の刃渡り60cmくらいで取っ手が30cmくらいの丈夫そうなのができた。なんの金属化は知らん。本物の剣を見たことがないからちゃんとイメージできていないが、大丈夫らしい。

次はナイフに設定を考えてからかけようと思う。

まず刃は軽くて丈夫なはずのアルミにするのでアルミ箔を思い浮かべる。刃渡り15cmくらい持ち手は10cmくらい。そして鞘？ も思い浮かべる。これは銅に決めたため10円のイメージ。色の違いが判るし。

そしてそれらを『2つ』思い浮かべる。魔法なんだから質量保存を無視できるかもしれない。

「『錬金』」

おお。失敗して成功した。2つにするのは失敗したが、茶色ところどころ青っぽい鞘、銀色のナイフは1つできていた。鞘の青っぽいのは思い浮かべた10円が古いのだからそれについてる青いのだと思う。何かは知らん。

とりあえず材質と形を変えることができるってことはわかった。

「『不変』」

これで作ったものは壊れないはず。あとは剣を入れる鞘とそれを吊るすベルトをつくればいいかな。

それより、異空間の倉庫を怖いけど挑戦しようかな？ かばんとか斧とか邪魔だし。

では、挑戦してみるかイメージが良ければいいはず。現代人の想像力なめんな。

ブラックホール見たいのを思い浮かべ思えば出てくるように名札が付いた鎖がその入口についているイメージをする。

そして入口にチャック、掃除機のような吸い込み機能などどんなイメージを付け足していく。

途中覚えきれなくなってきたてノートに書いていく。やばい超楽しい。

旅行だって行くより計画のしてる時のほうが楽しく感じる、それに近い。

が、昼ぐらいになり腹が減ってきたため中断。ご飯食べたい……。

「そつか。無いなら作ればいいじゃない」

「ご飯ものだし作れるはず。何年も食べ続けた米ぐらいは成功するはず。できなかったら泣く。」

「『錬金』」

おお！ 湯気が出ていていかにも炊き立て感のあるおいしそうな
のができた。地面の上に。

「『鍊金 茶碗・ご飯』」

今度は呪文も変えてみた。茶碗の中にほかほかのご飯が入っ
てる。呪文もイメージの補強でしかないみたい。

「『鍊金』」

箸を作り獣のようにご飯を食う。見た目だけで食べれないかも
か思ってたがそんなの吹っ飛んだ。うまい。料理しないでこんな
うまいの作れるとか最強すぎる。

夢中でおかずも作りデザートまで作って豪華な昼ご飯を終わら
した。

午後は家を直そうと思う。自分のために。

近くの家に『鍊金』をかけ窓のない四角い建物を作る。大きさは
縦5m横5m高さ3mぐらい。目の前に戸を作り中に入る。明かり
は別にいらぬ。

そして中にベットを『鍊金』し寝転がる。やばい超気持ちいい。
このまま昼寝でもするか……。

「ごめん。ごめん。人がいるとは。思わなかったの」

俺は今、女の人に謝られている。

なんでこうなったかという、昨日この町付近ですごい光がしたのを見てやってきたらしい。

そして、廃墟になっっているこの町をみて、昨日の光は魔物の攻撃魔法でまだ魔物がいると思ったそうだ。

で、廃墟の中にあるこの長方形の建物を魔物の拠点だと思い外から魔術を放ち、瓦礫の中で伸びている俺を発見したらしい。

「でも君はどうしてあの攻撃の中でも生きてるの？」

「生きてて悪いか」

たぶん最初にかけた魔法が残っていたんだと思う。心なしか体が軽いし。が、睡眠を邪魔された怒りが収まらん。それに魔術？ 魔法じゃないのか。

「いきなり魔術？ をぶつ放すとかやめろ。せめて確認してからにしる。それより、此処の世界について教えろ。あと魔術についても」
「此処の世界について？ この世界は『リエリス』ここは資源の町『エマルテ』あなたに放った魔法は中級攻撃魔術『尽きぬ獄炎』よ。もしかして攻撃のシヨックで記憶なくしちゃったの？」

「頭はお花畑になってない。それより魔法と魔術の違いをプリーズ」
「やっぱパーになってるわね」

失礼なやつだな。というか文字と同じく会話は通じるのか。勝手に変換とか、ことわざも通じるのか？ おいおい検証しよう。

「はやく説明しろ」

「もう。威張らないでよ。で、魔法と魔術の違いだっけ。魔法は神または精霊に思いを伝えて奇跡を起こしてもらう。効率悪いけどいろいろなことができるわ。魔術は術式を使って発動する効率とスピード特化の奇跡の起こし方」

全部聞いたがまとめると、魔術は先に紙に書いておいてそれを見せて奇跡を起こす。

紙に書く（術式作る）は面倒だができてしまえばすぐに発動できるらしい。欠点は術式をいろいろ知らないと臨機応変に対応できないらしい。だから魔術書なる術式の辞典を持ち歩いているらしい。

魔法は自分の要望を1から伝えていって奇跡を起こす。

1から伝えるため応用が利くらしいが時間がかかるのが欠点らしい。だけど魔力をたくさんあげてイメージを勝手にくみ取ってもらう方法もあるそう。だが大抵は魔力が足りなくてダメらしい。

大人数でやると魔力は足りてもイメージがばらついてダメらしい。俺はちゃんとイメージしたのがよかったのか？ でもちゃんと伝えてないし。魔力が多いとか？

魔力は自然にある魔素を人が取り込んで変換しているらしい。で人それぞれの色みたいのがあってそれが魔法・魔術の得意不得意に直結するらしい。

魔素を魔力に変換するのは瞑想とかで意識的に早くできるらしい。変換するとき色が決まり自分のタンクにたまってゆくこれが魔力の総量。総量は限界までたまったタンクを無理やり広げるか空にして少し大きくして溜めていけば増えるらしい。

一般的な修行は瞑想して無理やり満タンのところに変換したのを溜めていく方法らしい。変換するスピードも上がって一石二鳥のとこと。

要するに素材（魔素）で料理（変換）して神・精霊に出す（儀式）見返りもらう（魔法・魔術）ってことだ。

神・精霊の好き嫌いは（色）で、見返りが増えたり減ったり。

「よし。よくわかったが、もう暗いしどつか町まで案内してほしい。それとほかのこともいろいろ教えてほしい」

夢中になるって怖いね時間がたつのが早すぎ。いつの間にか怒りも収まったし。

「なら、野宿でいいじゃない魔法でさっきの建物も建てたんでしょ？ 私もそこに泊まりたいし。ほかのことは明日いろいろ教えてあげるわ」

「わかった」

女性と2人つきりとかわくわくするな。この人よく見るとすごいきれいだし。服で体つきは分らないが身長は160cmぐらい肩まで伸び所々はねている金髪。それも安っぽさを感じるわけでもなく自然に彼女になじんでいる。優しいがどこか鋭い深く紅い目。そして白くきれいな顔。優しいようなお姉さんのようなイメージ。まあ、魔術ぶち込まれたけど。

「どうしたの？もしかして私邪魔？」

「いやなんでもないです。今すぐ作ります」

顔が近くにあった。びっくりして口調がへんになったが気にしない。

「『錬金』」

今回の昼寝の時作ったやつを2個つなげたもの。さすがに一緒の空間では寝れない。

「すごいわね。どれだけ魔力があるのかしら？」

「魔力の量ってハカれるのか？」

「いいえ。神様に聞けば大まかに教えてくれるぐらい。明日詳しく教えるわ」

「了解。じゃ、おやすみ」
「おやすみ」

明日が楽しみだ。　　というかあの何者だ？　　名前聞いてないや。
明日聞けばいいか。

異世界で初めての戦いを

爆睡していると、獣の低いどこか怒りを感じる唸り声で目が覚めた。

普段はなかなか起きられないがキャンプとか行くと無駄に早く起きたり少しの物音で起きる、そんな感じ。だが、人の眠りを妨げるとか死刑レベルだな。

壁に耳をあてて音を聞いてみると家の周りをぐるぐる回っているみたいだ。

戸に鍵がかかるようにしててよかった。寝ててそのままお陀仏だけは避けられた。

だが、隣の女の人は大丈夫だろうか？ 出ていくのは危険だし。というか今は朝なのか？ 窓がなくてわからん。

声を出して聞いてみるか？ だけど外の獣を刺激しそうで怖いな。

「やつほー、そっちはだいじょーぶー？ 食べられてない？」

うん。俺の心配は必要なかったみたい。それになにあの余裕、イラっとくる。

もう女の人が声出しちゃったからしゃべってもいいか。

「うるせっ誰が食われるか。それよりなんなんだこいつら」

「たぶん、この町を襲った魔物たちが返ってきたんだと思う」

それもそうか、襲われたのは最近ばかりだし戻ってきてても不思議じゃない。

それに戻ってきたら壊れてない不思議な建物があったら警戒するはず。

「ねえ、建物建てたみたいに壁に穴開けてこつちこれないの？」

ああ、そうだ。鍊金があるんだった。とりあえず暗くて見えないので

「『明かり・球体バージョン』、おお、電球が浮かんでるみたい。よし、お姉さん壁から離れてろよ、『鍊金』」

よし、成功した。間違つて別の壁に穴をあけるってことにはならなかった。

「やつぱ便利ね、その魔法」

「そんなことより、今はこの状況をどうするか、だ」

外に魔物がいるらしいから戸をあけて入ってくるやつを倒してけばいいか？

それか建物に屋上作って上から攻撃？ でもどっちも空飛ぶ奴いたら困るな。

前者は全部倒したと思って出てつたら攻撃くらう、後者は屋上出た途端攻撃くらうなんてことになりそうだし。

さてどうするか。ってやば。奴ら壁に攻撃してやがる。体当たりすんな、どんだけ力があるのかわからんが魔物っていうくらいだし壁壊わされそう。

「ねえ。私があなたに撃ち込んだ魔術を体当たりされてる壁に放つていいかしら？」

なんか女の人が言っている。放つたら崩壊すんだろこの建物。正面のやつ倒せても周りのやつらにやられて終わるっての。

「何も言わないってことはいいんだよね？ こほん、『尽きぬ獄炎』」

あのバカやりやがった。大蛇のような炎が壁を砕き真正面の犬み
たいのを燃やしながら突き進んでいく。俺ってあれくらったんだ…
…ほんとよく生きてたな。って、崩れてきた！。

「ちょマジやめろお前、寢床崩れてきただろ！」

「気にしない気にしない。それより戦う準備しなさい。いろいろ知
らなくてもそのぐらいはできるでしょ？」

走って魔術で魔物を蹴散らしたところから脱出すると犬っぽい奴
が蟻みたいにうじゃうじゃいやがった。っていうかあのバカ俺が戦
えると思ってるやがる。まあそうか斧とか剣とか持ってたしな。

仕方ない魔術の放てるバカのそばで魔術を抜けてきたやつ叩けば
いいか。

「あれ？ 突っ込まないの？ 援護しようと思ったのに」

「死ねと申すか。まあ、まわりに来たやつだけ倒すからほかのよろ
しく」

「もう。えばってるくせに臆病なのね。まあいいわ『炎上幕』」

バカを中心として炎が渦をまいて広がってゆく。こんな魔法使う
奴がいるのに誰が突っ込むか怖すぎるわ。よし気を取り直して、最
初の武器は最初に作った西洋の剣でいいか。

「『炎上膜』『尽きぬ獄炎』『炎上膜』」

あれ？ 俺出番なくね？ それより尽きぬ獄炎って中級だよな？
それって魔力の消費量も多いんじゃない？ 連発していいのかよ。も

しかして強い？ ただのバカじゃなかったのか。

「『尽きぬ獄炎』……あ、魔力切れた。あとよろしくねっ」

前言撤回、バカはやっぱバカでした。ドキッとするような笑顔でよろしくと言われてもこの状況じゃ殺意しか湧かねえ。それにまだあと30匹ぐらいいるぞ。どんだけいるんだよ。

「こっちの鞘付きの貸してやるからお前も参加だ！」

「なにこの剣変な色」

「うるせっ。だまって戦って散ってこい」

大体剣一つでどうしろと。剣なんか握ったことないし。犬っぽい生き物殺すとか絶対トラウマもんだろ。

「私は散らないわよ。それよりそっちいったわよ」

おお、普通に戦ってやがるってマジだこっち来やがった。あっち行けや、女のほうがおいしいはず。とりあえず突つつくか、素人の振りだと躲されるだろうし。

っておお、ジャンプして背後にまわりやがった。

「「あ……………」」

人間痛すぎると逆に痛みを感じないんだね。うん、太ももから下持ってかれました。はい、もうなんかすごい冷静ですね。それにそのまま囲まれて捕食され中、なんで意識なくなないか不思議だわ。っておお、足が生えてきた。文字通り生えてきた。によきによきと。気持ちわるっ、向こうでみてたバカも唾然としている。

あれか最初にかけた魔法のせいか。とりあえず片足だけマツチヨ

にはなつてないみたいだしよかった。

それに体中が軽くなった気がする。魔術ぶち込まれた時もこんな感じがしたな。もしかして怪我をするとその部分だけじゃなく体全体が強くなるのか？

それにこの回復力、怖いけど突っ込み続けたらいずれ魔物倒せそう。

「ってバカ前向け前、魔物来てる！」

やば。バカが啞然としてると魔物が突っ込んでいった。

俺は魔物に食われてる最中だし。って痛っ、こんどは右腕持ってた。まあ、生えてくるんだけど。

立ち上がるうにも噛まれてかじられて時々手足を持ってかれる。

頭は両腕食わさせて防いでるけど、痛すぎる。何の拷問だよ、意識あるとかやめい。意識落ちてたほうがよかったわ。

まあ意識も丈夫に？ なってきてる気がするけど。

あ、バカが魔物に押し倒された。ありや終わったな。食われるわ。俺と違って復活しなさそうだしやばいな。

ああ、面倒くさいが半分俺のせいだし……。

「オラッどけろ。いつまでもかじってんじゃねー！」

え？ 叫んで腕を振るったら腕に噛み付いていた魔物が飛んでった。……強化されすぎだろ、まあいいや。とりあえず離れようとした奴の尻尾をつかみ、思いつき振り回して勢いをつけ、バカに襲いかかっているやつめがけてレッツ投擲。

「あ、しっぱちぎれた」

まあ、あんだだけ振り回したらちぎれるか。別にあいつにぶつかってもいいや。

「もう。私にもぶつけるなんてひどいじゃない」

「うるせえ、助かったことに感謝しやがれ」

「元はといえばあなたが原因なのに……」

バカに当たったのは、空中で魔物が動いたせいだ。決してしつぽがちぎれたからではない。断じてない。ないったらない。そんなミスは認めない。ただ、当たっても別にいいか、とは思ったけど。

そのまま調子に乗って魔物をつかんで投げまくる。逃げて行っても速く走れたため追いついてなげる。

調子に乗って剣を拾って叩きつけると魔物を真っ二つにし地面にぶつかって根元からまがってしまった。

ちっ、まあいいまだ斧があるし。今度は斧を拾って切りまくる。

同じ失敗は繰り返し返さないように地面すれすれで振り上げる。だんだん楽しくなってきた。

気が付くと魔物は全滅していた。バカはおびえた目でこっちを見ている。ああ、冷静になると血のにおいがひどい。

鼻につき、吐きそうになる鉄のにおい。たぶん精神面も強化されたのだろう。気分が悪くてもだんだん平気になってくる。

生き物を殺した罪悪感も感じない。ああ、かける魔法間違ってたな、っていうか魔法使えたんだった。

魔法を使えばもっとスムーズにいったのに。ああ冷静に考えてしまっ。周りから見たらきつと、すごい恐怖だと思っ。

斧を振り回し魔物を切り刻んでいく男。うん、精神強化される前の俺だったら、即にげてる。

おびえた目で見てくるバカの気持ちもわかる。

「わあ、すごいわ。あなたは凄腕の冒険者なのね」

え？

おびえたように見えたのはただの見間違いだったらしい。
というか死体だらけの中で笑顔を振りまくな。怖いわ。

冒険者。それは魔物を殺し素材を取りそれを売って生計を立てる人のことらしい。

バカも冒険者だそうだ。それに凄腕になると俺よりもすごい人がいて別にこれしきどうってことないみたい。

今回倒した犬っぽいのはガルっていう名前で毛皮と爪が売れるらしい。それと討伐レベルがFいわゆる雑魚らしい。

討伐レベルはF→Sまであって

Fが雑魚

EがFの5匹分に匹敵するぐらい

Dがなかなか強い

CがDの5匹分に匹敵するぐらい

Bがとても強い

AがBの5匹分に匹敵するぐらい

SはAクラス？なにそれって強さらしい。

そしてF→Eが『初級』D→Cが『中級』B→Aが『上級』Sが

『災害級』と大まかに分けられているらしい。

冒険者にもランクがあって

同じランクの魔物を10匹以上でその魔物と同じランクになれるらしい。

災害級だけは1匹倒せばSランクになれるそうだ。

ランクはギルドカードを見ればわかるらしい。
ギルドカードはギルドで作れるそうだ。

うんこれ以上聞くと頭がパンクするのでギルドとギルドカードの説明はギルドに行ったときまとめて説明してもらうことにした。ギルドカードはぶつちやけほしい。

バカのギルドカードを見るとDランクだった。なかなか強い奴を10匹以上倒してることになる。まあ、あんなに魔術使えればそんなにになるか。そして名前が『アル・ブロム』だった。男の名前じゃないのか？異世界だからいいのか。
まあいいや、それと加護はなかった。

「アル・ブロム？ 変な名前」

「うるさいわね。あなたはなんていうのよ」

名前か。ここは異世界だし適当に名乗ることもできる。やべ、わくわくしてきた。なんて名乗るかな。

以上に回復早いかからカイフク↓カーフとか？ 神隠しにあったからカミカクシ↓カーシとか？ ……真面目に考えよう。

結局いいのが決まらなくて、うんうん唸っていると、アルが名前もわかんないの？ とか言ってきたのでノーネーム↓ノーネ↓ノルネ↓ノル、にした。

ノル……うんネーミングセンスがないのは気にしない。ぜんぜん真面目に考えてないのも気にしない。

「俺はノルだ。変な名前とは言わせない」

「私のより変じゃない。でも、よろしくねノル、私はアルでいいわ」

なにがよろしくなのかはわからんが、よく考えると町まで連れて

ってもらった約束してたっけ。

「変いっな、それとこっちこそよろしく」

異世界で武器を

「じゃあまずは素材はぎ取ろっか」

「手本を見せてくれ」

「ほんとに頭大丈夫？」

すっげーかわいいそんな目で見てきやがる。やめろ、そんな目で見
るんじゃない。

とりあえず異世界から来たっぽいということと言ったほうがいい
のか？ このままずっと頭おかしいと思われても嫌だし。

でも隠しておいたほうがいいのかなとも思う。さてどうするか。
山奥で育って独り立ちして来た、とでもいうか。

でも、この辺山あるのか？ って異世界から来たかもって言うて
もどのみち頭おかしい扱いか。うぬぬぬ。適当にわけありってこ
とでいいか。

「頭は大丈夫だ。ただわけあって常識がないだけ、だからかわいそ
うな目で見ろな」

ほんとやめれ。ガラスのハートが傷つくじゃないか。まあ、精神
強化されて防弾ガラスになってるがな。

「わけありで常識がないって……まあ、魔法をすらすら使えるし、
怪我の回復もおかしい速度。それにものすごい身体性能。わけあり
っていうのも不思議じゃないわね。まあいいわ、今は剥ぎ取りしま
しょう」

「よし、教えやがれ」

「……………見て盗みなさい」

「アルのいーじーわーるー」

「さて、あなたのことを人型の魔物として登録しに行ってくるわ。おとなしく待っててね」

やばっ、本気で怒らせちゃった。ここは日本の文化、土下座だろ。反省も後悔もしてないがな。

「ごめんなさい。調子に乗りました。なんならこのまま踏みつけてくれてもいいです」

「しかたないわね、でも次はただじゃおかないわよ？」

ふう。危機は去った。だがちゃんと踏んづけていきやがった、頭を。自分が悪いんだが容赦無いな。

「剥ぎ取りだけどさつき言った通りガルは爪と毛皮が素材よ。爪は腕ごと切る人もいるし引っこ抜く人もいるわ。まあ、根元から残っていれば大丈夫よ。」

「OK引っこ抜いた。毛皮の説明も頼む」

「引っこ抜くの早いわね。毛皮だけと適当な大きさに剥けばいいわ。ただし切れ端みたいなのはダメ。素材によっては切れ端でも高価なのはあるけれどね」

「了解。切れ目を入れて引きちぎってみる」

うんうん。動物を解体してるのになんも感じねえ。これぞ精神強化の恩恵か。あんまりいいもんじゃないな。罪悪感よ、いつまでも友達でいよう。

そんなことを考えてると目の前には、血だらけの毛皮に爪の山が出来上がっていた。魔物は合計76匹毛皮はちゃんとしたのが69枚、爪は1000を超えたあたりで数えるのがめんどくなっただけそれ以上。

アルが言うにはCランクの魔物1匹丸ごと分ぐらいいい。

よくわからん。まあ換金するときに聞けばいいか。

「かなりの数が集まったわね。しかし、ここで問題発生です。私達にはこれだけの数を持っていくことができません。なので良質のだけ選びましょう。」

マジか。剥ぎ取った意味ないじゃん。途中で気が付けよ。ん？

……………そうだアレがあるじゃないか。剥ぎ取った意味あってよかった。骨折り損のくたびれもうけにやらんでよかった。

「持っていけない。ならば持つて行けるようにすればいいじゃない。というわけで中断してた異次元バックを作ろうと思いまーす。ワー、パチパチ」

「パチパチ。で、異次元バックてな〜に？」

おお拍手してくれた。結構うれしいな。よし、張り切っちゃうぞ。

「説明しよう。異次元バックとは異次元バックである。以上おわり」
「と見せかけてちゃんと説明してくれるのよね？」

「バックとついてるが鞆にはしません。なので説明しません」
「さっき次はないといったわよね？」

しまった。からかいすぎた。だが名前決まってるないしな！。名前決めてもらうか。

「残念ながら名前が決まってるないので出来上がったら命名をお願いします」

これで流せたらいいな。ていうかスルーしてくれ頼む。

「いい名前をつけてあげる。でもお仕置きはするわよ?」

「お仕置きは嫌……じゃないかもしれん。お仕置きって響きがいいよね。まあいいやさっそくとりかかるか」

アルの魔術で黒焦げになり魔物の地で赤黒くなった瓦礫の中からなぜか無事な鞆を拾い設定を箇条書きしたノートをとりだす。そして、書いてある設定を思い浮かべ

「『倉庫』」

おお、成功だ。目の前には銀色のチャックが開いて浮かんでいる。中は真つ暗だ。ためしに瓦礫を『吸い込め』とやってみると、廃墟になった町全部吸い込みそうになったので途中でやめた。素材も一緒に吸い込まれた。

チャックは閉じると消えてしまったが、『倉庫』というところあらわれ中には物の書かれたプレートがながれた鎖が伸びていた。名前のわからないものは絵になってる。鎖に触れて引き出そうとすると手元に引き寄せられてきた。

そして。チャックを閉じ目の前に向かって『発射』と、すると瓦礫がものすごい音を立てて飛んで行った。

「またものすごいもの作ったわね」

「いい出来だ。うむ納得、納得で名前なんだが……」

「倉庫でいいわ。あなたそういつて発動してたし。」

もうこれで、魔物吸い込んで戦えば負けなくね? 素材欲しくなったら発射して地面にぶつけて殺せばいいんだし。

「素材も入ったことだし、町に行きましょう。あ、戦闘でそれ使わ

ないでね。いちいち周りの物ごと吸い込むのは迷惑だから。うまくつかえるようになってからにしてね」

……まあいい。接近戦ではたぶん無敵だし。最悪勝てなくても負けないし。最強の壁になるし。

町を出て薄暗い森の中を進む。時々ガルが出てくるが殺して吸い込む。吸い込むのは『吸い込み・ガル』としてガルをすいこむイメージにしたらすんなりできた。

魔物はガル以外にもFランクのダンゴ虫っぽい大きさが1mぐらいあるゴダムやEランクの蜂が50cmぐらいに巨大化したようなビスっていうのが出た。

ゴダムは殻がビスは針と羽が素材らしい。吸い込みを狙ってできるようになったので出てきた瞬間に吸い込みまくっていく。

アルからは便利ね、といわれた。そして森の出口に差し掛かった。

「あ、あれはスライムね。Cランクよ。なんでこんなところにいるのかしら？ ダンジョンから出られないはずなのに。」

「ダンジョン？ なにそれ。説明ブリーズ。あと、あれ吸い込んでいいしょ」

「吸い込んだじゃダメ。一回戦ってみて御覧。CランクがどれだけFランクと違うかわかるいい機会よ。あと吸い込みばかりじゃ戦闘経験がなくて困るわよ」

「OK。別に戦闘経験はなくていいけど。まあ、戦ってみるわ。終わったらダンジョンについて教えて」

「いつてらっしやゝい。気を付けてね。あと魔法も禁止。倒せなかったら私が焼き払うから」

さてと、武器は斧でいいか血で赤く染まってるけど。スライムは体長が50cmぐらいで丸っぽい形。

スライムってどこに目があるんだ？ただ、ゼリーが動いてるようにしか見えないんだが。よくわからん。

奇襲で声を出すのはダメだがどっちが前かわからんから突撃するし。べつにいいか。

「貴様はどっちが前なんだ。はっきりしやがれコノヤロウ」

半分逆切れして突撃をかます。動きは遅くあっけなく真つ二つになった。Cランクっていつてもあっけないな。アルの嘘つきめ。

そして、後ろを向いて帰ろうとしたのがいけなかった。真つ二つになったスライムが分裂したまま背後からくつついた。

「ノル、スライムは酸で獲物を溶かして食べるわ。それと、炎で全部蒸発させるかして水分を飛ばさないと倒せないわよ」

「そんな大事なことは早く言えよっ！」

「でも、油断の恐ろしさがわかったでしょ？」

魔法禁止で水分なくせとか。いじめだ。

畜生、スライムめ引きちぎっても、ちぎったやつが目の前でもう1匹のスライムになりやがる。

てか、背中が熱い、食われてる。まあすぐ治るからいいが。ってあぶねえ。目の前のスライムが触手みたいのだしてきやがった。

うねるな気持ち悪いぞ。触手を切り落として目の前のやつに突っ込み思いっきり踏みつける。

水分飛ばせばいいのなら小っちゃくして地面にしみこませればいいはず。ふみふみ祭りだ。

切り取った触手がスライムになるがそいつも踏む。踏みまくる。が問題は背中の中。やつ。食われる↓大きくなる↓引きちぎる↓増える。のループ。

背中についた水分とかどうやってとるよ？ 背中から、地面にぶつかればいいのか？ やってみるか。

結果は失敗、どうしてもつぶしても立ち上がると背中に他のがくつついてくる。

さてどうするか。

「倒せないの？ 魔術を使って焼き払う？」

「やめい」

やばい。焼かれちゃう。あれ？ どうせ焼かれるなら自爆しちゃうええよね？ 体の表面を爆破させればいいか？

いや、斧を爆破させればいいのか。体は酸で溶かされてるうちにさらに丈夫になってるし、行けるだろ。

それに魔法はダメでも魔術にすればいいはず。術式を出すんだっけ？ 斧に漢字で爆発とでも書けば、術式に見えんじゃね？

とりあえず錬金は使えないから、丈夫になった自分の爪で斧の持ち手の木の部分にひらがなで『ばくは』と掘る。

漢字とか細かくて無理。そして……。

「『ばくは』」

おー、吹っ飛んだ。半径10mはなんもない。アルはもつと遠くで見てたから大丈夫。

が問題は服がなくなったことだ。この爆発の中心だもん服、粉々アルにみられてないことを願いながら

「『鍊金・ジャージ』」

よし。ジャージはきた。ノーパン、ノーシャツだがな。まあ、あとで作れば問題ない。

「もう。魔法はダメって言ったでしょう」

アルさん登場。たぶん見られてないっぽい。あえてスルーしてるだけかもしれないけど。ていうか100%そうだと思う。服変わってるのに聞かないんだもん。……もうお婿に行けない。

「……魔法じゃない。術式っぽい刻んだから魔術だ」

「もう、まあいいわ。でも普通に燃やせばよかったんじゃないの？」
「あ」

「それにスライムは蒸発させて凝縮した体液が素材なのに……」

そうか、そうだよな、いきなり自爆とか普通は考えないか。それに、焼き払うつてのは素材をとるためだったのか。ただ炎が得意なんだと思ってた。

まあいいや、自爆は体が強化されてくし相手かわせないからいいか。

それより、斧なくなっただし。余ってる剣を斧にしちゃうか。斧に意外と愛着あったし。

「まあいいや。それより武器作るからちよつと待って」
「何を作るの？」

「斧。イメージは1mぐらいの木の棒の先のほう左右に三日月の刃に長方形を足したような感じの金属を付けた斧。」

「要するに戦斧ね」

「短めだがそのほうがガードしやすいしな。しなくても大丈夫だけど」

木の部分や金属の部分には感じでなんか掘りまくるつもり。爆破にも耐えられるスーパー斧。

「では『鍊金』そして『ズーム』とどめの『鍊金』」

最初の鍊金でイメージの斧を作りズームで拡大して見えるようにする。そして、漢字を鍊金で掘っていく。イメージは米に絵をかくやつ。

掘った漢字は『不変』『頑丈』『耐性』『固定』『起爆』『爆発』『自動修復』『障壁』そして木の部分に追加で『握りやすさ』『金属のところに追加で『切断』『断裂』とした。

かなり時間がかかり、途中でアルに邪魔されながらも夜になるころには作業が終了した。

「できたっ。マイ斧、完成。折れぬ壊れぬ守りきる。切れぬものなし最後は自爆。の最高の斧だ」

「もうすっかり夜じゃない。それに最後は自爆って……。まあいいわ、寝るとこ作ってね。あとご飯もあなたが作って」

「了解『鍊金・家・飯』、これでいいはず。じゃ、いただきます。」

料理はとてもおいしかった。アルも機嫌を直したし。それに昼間のお仕置きするといったのも忘れてる。そして、お休みをして別れ明日に備える。

だが、俺は斧の爆発の威力を確かめるため錬金で地下にこっそり部屋を作り、防音や防振などをかける。

斧のことだが自爆は別に最後に使わない。最初から使っていく。このおかしな身体能力で突撃し、ほとんどの武器は受け止めれず真っ二つだと思うが、もし受け止められたり、外したとき、即、爆破する。

爆破じゃ斧は壊れないと思うし、自動修復もつけたから大丈夫だと思う。ただ威力が強すぎて自分も復活できない可能性がある。なので

「いくぜ初日のおさらいから『自己治癒』『超回復』『成長』『促進』そして追加で『再生』『強化』『能力上昇』『永続』『耐性』」

これで復活して強化にも磨きがかかったはず。精神面が不安だが。そしてお待ちかねの『自爆』だが起爆と爆発と刻んだため起動するのに『爆破』と結構迷った。

だからどっちでも爆発するようにした。ぶん投げて自爆だとなんかへんだし。

「というわけで『自爆』」

低く激しい響きが地面を揺るがし、嵐や竜巻のような爆風が吹き荒れる。

やべー、地下の部屋は100m四方はあったんだが、ものの見事にすべての地面が砕けていて壁にもヒビ、天井も落ちてきそう。とりあえず鍊金しとく。うん凶悪だ。突撃して100m四方爆破を發動とか変態だな。まあいいや。

それより耐震かけたが騒ぎになってないよな？ アルに明日聞いてみよう。ちなみに体は全身粉々。復活したけど。もしかして不死身になった？ 寿命があるか。でも『永久』ってかけたよな？

魔法の効果が永久にしたいんであって命が永久とかは嫌だぞ。まあ、いいやもう。

疲れた寝よ。上に行くのもめんどいし『鍊金・ベット』」

そのまま、ベットにダイブし、糸の切れた人形のように眠りに落ちた。

異世界でギルドを

「もう。どこ行つてたの。おいていこうかと思つたんだから」

「すまぬ。寝てたわ」

昨日、俺は地下で寝たため居場所がわからず、呼んでも反応がなくおいていこうか困っていたらしい。

よかった。昨日の自爆したときの揺れや音は大丈夫だったみたいだ。防音は中の音を外に漏らさないだけじゃなく外の音も遮断してたみたいだ。

もしかしたら、ただ寝てて聞こえなかっただけかもしれないが。それにしても町に案内される前に置いてきぼりにされなくてよかった。今度から気を付けよう。

「じゃあ、俺にとつての朝ごはん、アルにとつての昼ごはんを食べて町に行こうじゃないか」

「昼ごはんはもう食べたわ。あなたはご飯抜きね。ほらっ、早く家を消してついてきなさい」

「悪魔め。食べ物への恨みは恐ろしいぞ」

「待たせられる恨みも恐ろしいわよ？」

……しかたない。出発するか。それに早く町に行きたいし。

「『鍊金』、なあ昨日言っていたダンジョンについて道中、簡潔に教えてくれ」

「しかたないわね。町に着いたらギルドがあるから細かいことはそこで聞いて」

ダンジョンって響き、わくわくする。

「ダンジョンは昔、魔物が大量発生したときに地下に穴を掘って結界を張って閉じ込めたのが始まりなの。普通、強い魔物も抑えられる結界は弱いのも抑えられるのだけど、数が数なだけに相当負荷がかかっちゃって仕方なしに、強いだけを抑える結界。もう少し強いのだけ。さらに、って分割したの。そうしたら中で勝手に生態系ができたの。結界はそのダンジョンの真上にある町『エクラド』が管理し、魔術師および魔法使いが年に2回集められ補強しているわ。」

「ふむ。じゃあアルも補強に行ったりするの？ それとダンジョンは1つなの？」

「私はもともと補強に行った帰りだったのよ。ダンジョンは1つね。でも魔物が住み着いた洞窟とかは探せばあるわ。あ、あと野生にしているのは閉じ込める前に逃げたり穴に誘い込まれなかった奴らよ」「ふーん。じゃあダンジョンでできることは？」

「ダンジョンに生態系ができてるって言ったわよね。それも結界のおかげで入口から奥にどんどん強くなっていくの。だから、入口で鍛えて徐々に奥に行って強い奴から素材を剥ぎ取って儲けれるわ」

「宝箱とかないの？」

「誰かが隠せばあるわ。それより魔物に負けて死んだ人から装備なんかをとったほうが宝箱探すより儲かるわよ」

「夢がないな。じゃあ、補強ってどんなことするんだ？」

「夢がなくてもいいのよ。補強は生態系ができてるためいくらか魔物を狩っても全体は増えている。だから、結界を広げるとその強化ね。結界のかなめの結晶があってそれに儀式をやって魔力を注ぐだけ。結晶は盗むのは不可能よ」

「なんで？ まあ盗んでも魔物あふれて終わりか」

「まずダンジョンで鍛えられた冒険者が多数いること。結晶が長年魔力をあてたせいで巨大化。魔術・魔法は吸収。武器で攻撃しても障壁はつてる。以上よ」

「わかった。ってあのでっかい城みたいのあるのが次の町か。あそ

「こは何の町なんだ？」

「ふふつ。あそこはダンジョンの町『エクラド』よ」

おお。さつそくか。絶対ダンジョン行こ。わくわくしてきた。
このわくわくを抑えるなんてもつたない。町まで全力疾走だ。俺
は風になる。

「ちよつとまって。おいてかないで。それに門番いるわよ」

ふう。アルがなんか言っていたが置いてきたが、門番がいてはい
れねえ。身分証明書出すか、ギルドカードを見せるとかどっちも持
つとらんわ。

仕方なくアルを待つことにし、門番に邪魔そうな目で見られなが
ら門の横のほうで待つ。

しばらくしてアルがやってき、やっと入れることになった。

「おいお嬢さん、連れの面倒ちゃんと見とけ」

「ごめんなさい。この人いうこと聞かないのよ」

ほつとけ。

「もう、あなたのせいで私が怒られたじゃない」

「ごめんよ、もう2度としないと誓おう。あ、やっぱりやめた。誓っても守れないから今のなしね」

「もういいわ、あなたについて注意するのはあきらめるわ」

「諦めないで。で、まずはどこ行くの？」

「ギルドよ」

ギルド、ぶっちゃけなめてた。酒場っぽいところを想像してたが、城みたいところがそうだった。

色は灰色でそれも白い城壁に黒で書かれた術式らしきもののせいでそう見えるだけ。とても怖い。

それにさすが異世界。中に入ると柱が異様に少ない。建築技術発達しなさそう。

ギルドは5階建てらしく1階が受付。依頼を頼んだり受けたり、素材を換金したり。2階は食事処。3階から4階は宿。5階はギルド職員の仕事するところらしい。

あと、地下にダンジョンの入口があるそうだ。入口は転送の式が刻んであり大体、魔物の級が1つ上がるぐらいで設置されているそうだ。

でもランクで規制されていて最初は初級の入口しか行けないらしい。

だが行けないのは入口であって初級のところから奥までは時間がかかるが行けるらしい。

上級者がいちいち最初から通っていくのをわずらわしく思い設置したものを改良してつくられたらしい。

では、さっそくカードを作ってくるか。

「本日はどのような用件ででございますか？」

「ギルドカードを作りに来ました」

「わかりました。では、銀貨を10枚いただきます」

「私が払うわ。っと、はい」

「確かに受け取りました。では、このカードに刻まれている式の真ん中に血を垂らしてください。ナイフはこちらのをどうぞ」

「てい。やべ、塞がる塞がる、っとできた」

「傷薬をどうぞ。ではこちらの紙に名前をお書きください、偽名でも構いません。では少々お待ちください。できたらお呼びいたします」

ふう。傷口がすぐ塞がったときは焦ったが無事できた。それにあのナイフ切れ味いいな。魔物にかみつかれても平気になってきてたのに。

「じゃあ、換金してましようか。ついてきて」

「了解」

「本日はどのようなものをお持ち込みでしょうか」

「ちよつと待っていてください。ノルこつちきて」

「なに？」

「あなたの倉庫はとても目立つわ、わけありで何も聞かれないわよ。って言うてたし、あんまり見せびらかさないほうがいいわよ」

「おお、わかった。じゃあアルの袋と鞆に入りそうな分だけ出すか」

「すみません。袋から出すのに戸惑って。じゃあ鑑定お願いします」

「はい。わかりました。素材はガルの爪に毛皮、ゴダムの殻とビスの針、羽ですね。この量ですと……合計で銀貨2枚、銅貨が7枚、石貨が5枚ですね」

「ありがとうございます」

「なあ金の価値がわからん。おしえてくれ」

「……………そんなこともわからないの？」

「わけありなんだ」

アルにため息をつかれながら説明された。4人家族の1か月の食費や宿の値段などから推測すると、石貨が10円、銅貨が100円、銀貨が1,000円、金貨が100,000円、白金化が10,000,000円らしい。

ギルドカード10,000円もするのが高いな。それにフランクの素材はやっぱり安い。まあその気になったらお金、鍊金で作れるから別にいいけど。

「ノルさん、ギルドカードができました。受付までお越しください」
「アルちよつと待っていてくれ」

ギルドカードができたみたいだ。いつちよ行きますか。

「はいこれがギルドカードです。無くした場合はもう一度銀貨10枚でおつくりいたします。カードの説明をいたしましょうか？」

「お願いします」

「ギルドカードにはランク・名前・パーティー・級・称号・加護が乗ります。名前と称号は誰でも見ることができ、称号を手に入れると名前の前に称号が付きます。称号はその人の特徴を表し、なお、上級以上になるとギルドからつけられます。ランク・パーティー・級・加護はオープンと唱えると見ることができクローズというと隠せます。ランクは強さの目安、級は入れる入口、パーティーは登録した仲間、加護は神が気に入ったものに与えるものです」

「神？」

「はい、一般的には奇跡を起こしてくれる精霊や神がつけてくれるものでない人のほうが多く、持っているだけで一種のステータスとなります」

「おおー、じゃあ魔力など総量を神に聞けばわかるといわれたんですが本当ですか？」

「はい、ですが表現があいまいで気まぐれでしか答えてくれないので正直あまり意味がありません」

「そうですか。ではまた何か聞きたくなったら聞きに來ます」

「わかりました。では今後ともギルドをよろしくお願いします」

「はい。ではさようなら」

よし。ギルドカードが手に入った。さっそくオープンと唱えみてみると

名前	ノル
パーティー	なし
ランク	なし
級	初級
加護	『異世界人への手向け』

え？ 加護が付いてる。でも人に見せれないな。というかこっちの文字が読めたり会話が通じたりするのはこれのおかげか？
神様ありがとうございます。このご恩は3分後ぐらいまで忘れません。

「ちゃんと登録できたわね、あなたのことから受付の人を困らせるんじゃないかと思ってたわ」

「うるせ、じゃあ、町まで案内してもらったしお別れか」

「そうね、でもあなたのその耐久力は魔術師の私にちょうどいいの。だから気が向いたとき手伝ってね」

「いいぞ、そのぐらい。アルはそういえば帰る途中って言ってたしこの町からいなくなるのか」

「まあ、自宅に戻って荷物を整理するだけだから、1週間ぐらいで戻ってくるわ」

「そうか。じゃあ戻ってきたら、パーティー登録しよう」

「それもいいかもね。じゃあ1週間で中級に上がったらしてあげる。がんばってね」

「別にそこまでしてパーティーにならなくてもいいけどな。まあ、がんばるわ」

「じゃあ、またね」

「じゃあな」

アルとは3日ぐらいいたのか。この世界初めての知り合いだし、
いなくなると少しさびしくなるな。

じゃあ、1週間後までに中級に上がりますか。

異世界でダンジョンを（前書き）

4話のギルドカードのランク
Fからなしに修正しました

異世界でダンジョンを

昼を過ぎたころダンジョンの入口の前に俺は立った。

初めてのダンジョン、めちやくちゃ楽しみ。

今のおれの姿は『ジャージ・自動修復バージョン』模様は黒に白と青い線が入っている。

そして自慢の武器『斧』折れぬ壊れぬ守りきる。切れぬものなし最後は自爆。の自信作。名前でも今度つけようかなと思っている。

「おい、入口に突っ立ってんな。さっさと行けよ。じゃまだ」

……………怒られた。うん、それじゃ行きますか。

「れつつらー!!」

地下1階

中に入ると、薄暗く、乾燥しているわけでもなく、湿っているわけでもない、そして空気がこもっている感じもしない変な洞窟らしきところについた。

初ダンジョン思ってたのと全然違う。

普通は、1本道で時々道が別れ迷ったりするのがダンジョンだろ。なんで、広い広場なんだよ。ていうか人多すぎ。

地下1階とか魔物絶滅させてるだろ絶対。しかも商人とかいるし。儲けるためとはいえ頑張りすぎだろ。自宅でも開いてるよ。

まあいいや、とりあえず奥に行こう。……奥ってどっちだ？

「進み方は階段か、明らかに急な斜面を削って作った感があるな」

人押しのけ隅々まで散々探したらやっと見つけた。魔物には一切出会わなかった。

では次の階へ、れつつらうー。

地下2階

この階も人が多いな地下1階の半分ぐらいだがまだ20人ぐらい居やがる。

階段の横に階段って地下2階楽だな。ではいざ地下3階へ。

地下3階

おお、魔物がチラホラいる。戦ってる人もいるや。いる魔物は気持ち悪い芋虫みたいなのだ。帰ったらギルドで調べよ。

ん？ やべ、大事なことを忘れてた。剥ぎ取る部位わかんねえ。仕方ない、ばれないように吸い込みして、調べた後、素材は売ろう。まあ今は報酬より量がメインだけだな。殺した量ってどうやって判断するんだ？素材の数からの判断？

まあいい。ここもパスして次以降から狩りを始めるか。

4階到着。

ふつつふ。狩りの始まりだ。吸い込みだけで言ってもいいが雰囲気がないので斧で切った後吸い込むことにする。

まずは手短に近くでうねうねしている芋虫に切りつける。……芋虫きめえ。切った瞬間、体液吹き出やがった。

気持ち悪いが『吸い込み』

そしてさらに進んだところに3匹まとめてきたので遠くから斧をぶん投げる。

体液が飛び出ても俺にはかからない。が斧が壁にめり込んでいき見えなくなった。

「しまった『戻ってこい』」

魔法であわてて呼び戻す。が、それがいけなかった。勢いよく投げた斧がそのままの速度で戻ってき、自分の体を上下に分けて行ってしまったのだ。

「痛って。まあ治るからいいけど。って、また斧飛んでいきやがった。今度はちゃんと捕まえたるぜ『戻ってこい』」

ふっ。勢いよく飛び出してきた斧を軽く体をよけ指を落とされる覚悟で捕まえる。

指は落とされなかったが手の平に刺さりやがった。さっき体が切られたのから考えると、すごいな。もう次は斧では切れないと思う。ためしはしないがな。

放置されてた芋虫の死骸を吸い込み、どんどん切っては吸い込んでいく。

あれ？ この階芋虫しかないんじゃない？ まあいいやギルドカード確認するか。

……あれ？ どこも変わってない。何か条件でもあるのか？

うーむ。ぜんぜんわからん。まあいいや階段も発見したことだし次の階へ行くか。

地下5階。

この階は壁にコケらしきものが生えていて今までの階よりすこし湿っぽいそれと細い通路で広間や小部屋がつながっている地形に変わった。

これが徐々に強くなるってやつか。考え事をしていると、前方にネズミみたいのが5匹ぐらい固まっていた。

その少し先にはきのこ？みたいなのが動いている。

両者を観察していると、ネズミがきのこっぽいのに襲いかかった。ネズミはチームワークが良く前から何匹かぶつかりきのこの気を引いて残りが背後からかじって行くという具合だ。

きのこは前から来たネズミに粉っぽいのをあてようと頭を振るが

すぐに引くネズミに当てられないでいる。

きのこの餌になってしまった。が、きのこを食べ終わったネズミがこっちに気が付いた。

5匹でバラバラにだが一定の規則は守り、こっちを攪乱しようとしてくる。

が残念だ。斧を平べったい方を敵に向け、うちわであおぐような感じでネズミに叩きつける。

ネズミは5匹ともホームラン。飛びすぎるのも困るので吸い込む。ネズミは大体5匹で1グループらしくその集団に何度も出会った。全部ホームラン&吸い込みをしたが。

そして地下6階への入口を見つけた。だがネズミが以上にいる。50匹ぐらいは絶対にいる。めっちゃきもい。

が、ホームランして吸い込んでいく、するときのきが階段を上ってきていた。

ネズミはそれを待っていてあんなにいたつばい。
ではきのこがやってきた地下6階へ突撃!!

地下6階。

「うげっ、きのこだらけだ。吸い込んだじゃうか……」

あまりのきのこの多さに斧は使わずいきなり吸い込み。意外と楽しい。

そして、掃除をした後のすっきりとした感じを味わいながら階段を探す。

階段を探しながら気が付いたが人がいない。地下1階にはいっぱ

いたのに。

昼から俺は入ったから進む人はもつと先にいるし入口の人たちはあそこ専門ってことなのかな？

まあいいや、階段も発見。サクッと進もう。

地下7階。

きのこの他にガルがでてきた。
切るのは面倒くさくなったので吸い込んでいく。

地下8階

きのこのにガルそして蝶みたいのが出てきた。
吸・い・込・み・じゃー！。

なんか単純作業になってきてつまらない。ペースを上げることにする。

地下9階

魔物がガル・蝶・猿になった。

地下10階

なんかでっかい猿がいる。

ボスキャラみたいなものなのか？

考えていると襲ってきたので斧で頭から2つに分ける。

するとギルドカードが薄く光った。

よく見るとランクの欄が

ランク なし+1

と表示されていた。

これを10にすれば次のランクに上がるのか？

よしやってみるか。

探してみると今までにであった魔物のがでかいバージョンが居やがった。まあどれでもいいか。

でっかいガルの首を落とし、きのこをスライスする。

そうして順調にでかい魔物を10匹殺し死体は吸い込んでおくそしてギルドカードを見ってみると

ランク F

になっていた。

おお、あがった。

じゃあもつとでかいの狩りまくるか。

でかいのを20匹ぐらい殺したあと死体をすべて吸い込んでおく。
そしてギルドカードを見るが

ランク F

で変わらなかった。

そういえばランクを上げるにはそのランクの魔物を倒すだけ何だか言ってた気がするので、こいつらではもう上がらないんだろう。

じゃあ次の階に行くか。

地下11階？

ここは、なぜか小部屋が2つあってそれぞれに転送の式が刻まれていた。

かたつばに乗って『転送』と唱えるが何も反応しない。

なんと唱えても反応しないので、もう1つのほうに行く。

「これってどこつながってるんだ？ 階段はちゃんと地下12階につながってるっぽいのがあったし。まあいいや、『転送』」

転送をすると少し嘔吐感がした。そして周りを見ると

「あれ？　ここ入り口じゃん。もしかしてギルドに戻ってきた？」

ギルドのお姉さんに聞くと、10の倍数+1階ごとに転送の式が書かれていて、21階のが11階の反応しなかったほうにつながっていて、11階のもう一つのほうが初級の入り口に繋がっているらしい。

次からはそれで行けばいいってことだな。

それと、魔物の換金部位がのつてる辞典を貸してもらった。見るのは無料だが、破ったり汚したりすると金貨1枚らしい。大事に大事に辞典を見て今日倒したやつを調べていく。

芋虫みたいなやつは『モルス』	換金部位	足
ネズミみたいなやつは『リジェ』	換金部位	牙
きのこみたいなやつ『ムルシュ』	換金部位	粉のついた頭
蝶みたいなやつは『フーテ』	換金部位	羽
猿みたいなやつは『キーモ』	換金部位	牙・毛皮

だそうだ。ギルドの隅っこで見られないように倉庫の中で素材を切り取り袋に移す。

「こんにちは。換金お願いします」

「こんにちは。こちらですね。この量ですと……」

銀貨45枚と銅貨5枚になります。

「以上でよろしいでしょうか？」

「よろしいです。では、ありがとうございました」

うむ。いい金になった。外はもう日が落ちてるし、ギルドの宿に泊まるかな。

ああ、先にご飯食べて行こ。腹減った。

ご飯はとてもおいしかった。なんかの肉となんかのサラダと、よくわからないものだらけだったが。金額は銀貨1枚と銅貨5枚だった。そして宿は、1泊で銀貨3枚らしい。ほんとに止まるだけでご飯もついてこない。だが契約すれば同じ部屋を借り続けられるらしい。値段は変わらないそうだ。

なので3日分契約した。毎日違う部屋だと落ち着かないし。ふう。明日は何をするかな？ ダンジョンでランクを上げてもいいし依頼を受けてみるのもいいかもしれない。ベットに寝そべって考えていると眠くなってきたので考えることを放棄することにした。

「あした考えよ。もう、おやすみ」

異世界でランクあげ

初ダンジョンを経験しFランクにあがった次の日、俺は、人を呼び込む活気のいい声、人々の行き来する軽快な足音に包まれ、空高く昇った太陽に見下ろされて起きた。

……しまった。また寝坊だ。まあいいや、めんどくさい。今日は休みだ。明日頑張ろう。

「おやすみなさい」

ふう。2度寝から目が覚めると見下ろしていた太陽さんとはとくにいなくなっていた。窓からくる風が何とも言えない。

ギルドって夜もあいているよな？

明日頑張ろうはダメ、今日だけやろう、がいいってだれか言ってたけど、本当だ。一日無駄にしちまった。

よし出かけるか。

服はもうジャージのままでいいか。着替えるのめんどくさいし。

運動機能もいいからちょうどいいだろ。

斧は背負っていくか。何もないところから取り出したりしてるとこ見られたらやっかいだし。よし、専用の入れ物作ろう。

イメージはどうするかな。斧の入れ物？ 動物の皮で刃の部分包めばいいのか？ わからん。

それに、斧の名前も決めなくては。

それから2時間ぐらい便秘でトイレに籠った時のような唸り声をあげながら、ベットの上を転がり、床を転がり、傍から見たら絶対

引いてしまふ光景を作り続けた。

よし。イメージは完成し、倉庫にしまつてある瓦礫を錬金して作成。斧の入れ物は周りを傷つけないかつ取り出しやすいを中心に考え、ベルトに斧の刃に合わせた金属の型をつけ、それを開いて斧を入れ閉めて固定するようにした。

金型は背中の中に入るようにし、ベルトからも取り外せるようにした。

これで周りに刃が向くことはないし、危険になったら、鈍器として使えるようになった。

ベルトと金型を勝手には片方に『引き合う』+『もう片方に』引き合う。『』と刻んで魔術式でくっつけている。

イメージに磁石を思い浮かべた。が金属を引き付けるわけでもなくベルトと金型が引きつくだけだったので安心した。

そんなこんなで時間が深夜になってしまったがお構いなく出かけることにする。

おなかも減つたし、ダンジョン前に飯屋に向かう。

「ごちそうさま」

やっててよかった。基本ギルド内の施設はずっとやっているみたいだ。

じゃあ、ご飯がおいしかったので、気合を入れてダンジョンに向かうと思う。

気合を入れる理由がおかしいといわれてもご飯は大事。としかいいようがない。

今回は1階の入口からではなく、『転送』の式を使っていつてみることにする。

「『転送』」

前あつた嘔吐感はなくなっていて、見覚えのある場所に出た。

よし。ちゃんと11階にこれたな。
では、さっそく出発するでしょう。

地下12階

さすがに夜中なので人気がない。あれ？　今まであんまりダンジョン内で人と出会ってない気がする。まあいいか。

出てきたのはいきなり大きい猿。

きもつ、お前はボス的な位置じゃないのか？　そんなにポンポン出てきていいのか？　と思ったが気にしないで倒していくことにする。

背中の金型を開き斧を取り出す。そして突っ込んできている猿を

頭が両断する。

が倒しているうちにこいつらは賢くなっている気がしてきた。

10階にいたやつは自分から突撃していつて狩っていたから感じなかったのかもしれないが12階のは、ちゃんと隙を見たり、カウンターをしようとしている。

まあどっちも関係ないけど。

突撃ばかりではなくちゃんと受けとめようとするやつは、だした手ごと両断。

カウンターをしようとするやつは、斧を無理やり軌道修正してさせないようにして倒していった。

俺にカウンターなど100年早いわ。

倒した後は、レッツ吸い込み。

あらかた敵を倒し次の階段が見えてきたので進むことにする。

地下13階

今度はでかい蜂・ビスがでた。森で出会ったのも気持ち悪いが、でかくなつたほうはさらに気持ち悪い。

気持ち悪がつてても仕方がないので、正面まで駆けていき斧を振るう。

が正面まで来た瞬間、天井付近まで浮き上がられ振り切った斧が地面にめり込んだ。

俺は身体強化されているおかげで斧を振るのは斧すごい速さなはずだが、カウンターを狙われたり避けられたりする。

やっぱ直線的にしか振ってないからだめなのか？

なにか、補助になることを考えとこ。

考え事をしていると、蜂が針の先端から変な液体を飛ばしてくる。うげっ。とっさにかわしたが、地面にはねたのが当たっちゃった。液体にあたったところが肉を焼くような音を立てながら解けていく。

解けたジャージが自動修復のおかげで直っていく。が蜂が天井付近を飛び回り、次々と液体を飛ばしてきやがるので、修復が追い付かず体にかかっていく。

体も治っては解けての繰り返しが起き、気持ち悪い。だんだん解けなくなってきたいるが雨のように液体をかけてくるので、うつつうしい。

「頭にかけるな。禿げるだろうが。禿げたらお前の種族、絶滅させるからな」

斧を投げて当てようとするもかわされ、斧を戻して背後からぶつけようとしてもかわされる。

どうすっかな。逃げられるんだったら、逃げれないようにすればいいか。

さっそく俺は、液体の雨がきかなくなってきたので逃げずに全身で浴びながら、倉庫の中の瓦礫をショットガン、モデルはレミントンのM870。

銃などはネットでゲームなどをしていたので有名なのなら知っている。

さらにそれに錬金で『シールド』『障壁』『自動』『命令』と彫る。それを8つ作った。

これである程度の攻撃では壊れず、自動で狙い、壊れても自動で直り、命令した通りに攻撃をし、自分の周りを守り斧の補助になるものができた。

発射する弾は、『束縛』『拘束』『不自由』と彫った弾。これも自動で作成・リロードされる。

配置は螺旋を描くように足元から頭上まで、自分からは邪魔にならないよう2メートルぐらい離してある。

万が一見られても、魔道具？ だと言いはれば大丈夫なはず。普段は倉庫にしまっておくから問題なし。さっそく、動かしてみる。

「『命令』全機ビスを狙い、打ちまくれ」

おお。すげえ。ショットガンが連射しまくるって怖いね。しかも8台全部が。

途中で弾が液体に溶かされていくけれど、液体が雨なら、こっちは弾の海。

明らかに密度が濃いため溶かしきれない弾が当たっていく。

当たった瞬間、蜂は地面に落ちていく、が液体が止まったため弾が蜂に殺到して粉々になった。

まあ武器の性能わかったからいいか。

そのまま、周りに銃を展開しながら次に進むことにする。階段に行くまでに出てきた蜂は全部粉々になっていった。

地下14階

大きい猿と蜂が一緒になって出てきた。

猿が蜂に向かって発射された弾に巻き込まれてお陀仏した。

これ、周りに人がいるとき使えないな。今はいないから使いまくるけど。

そして粉々になった魔物を見て素材が取れないことに気が付き使

いまくるのはやめることにした。

銃を改造をし、『展開』で出せるようにし、『格納』で倉庫の中にしまえるようにした。

そして『格納』を使いしماっておく。

次から出てきたやつは、切り伏せて、吸い込んでいく。

「あ、天井付近に行かれた時も吸い込めばよかった」

今頃思いついても後の祭り。まあ、新しい武器ができたことを喜ぼうと思う。

地下15階

出てくる敵がただ大きくなったシリーズになっただけで、全然面白くない。

仕方がないので無視して、ボスのいるところまで急ごうと思う。

地下16階

斧を正面に出して出てきた魔物を弾き飛ばしながら階段を探す。

地下17階

蔵ついおっさんがいたため、ばれないようにしたの階段に向かう。
こんな洞窟内で知らない人と二人つきり、しかも会話になるとか
絶対いやだ。

他人にいきなり会話できる人って尊敬するわ。

地下18階

特になし。

地下19階

しまった。階段の正面に人がいるとか、さっさと行けよ、立ち止
まんな。避けて通れないじゃないか。

しかも次はボスがいるステージ。引き返すのは嫌だし。
無視して通るか？ でもそれだと嫌な人って思われるし。
どうする。どうする。どうしよう。

まさかの出来事だ。しかたない。挨拶をして駆け抜けよう。そう

しよう。

ボスもさっさと倒していかないと、あとから来て出会った時、絶対変な空気になる。それは困る。

しかたない。いざ、出陣。

「こんばんわ」

「あ、すみません、次の階で仲間が襲われ」

なんか言っていたが知らん。

俺は風になる。

地下20階

おお、でっかい猿が武装してやがる。

鎧を着て、剣を持つとか一気に難易度がってね？ ていうか鎧と剣はどっから出てきたのよ。

それがたくさんいるとか、絶対此处で死ぬ人多いな。

ん？ あれって人襲われてる？ 何とか逃げ伸びているけど、絶対そのうち死ぬな。

しかたない助けるか？ でも別にほつといてもいいし。ちらっと姿みせて、その反応で決めよ。

「え、人？ 助けて！ お願い、たすけて！」

やっぱ助け求められるよな。それにすっごい必死。しかたない。

「伏せてろよ！ 胴体と頭が半分になっても責任は取らん！」

とりあえず人を襲っている猿に斧をぶん投げる。

猿は叫んだ時こっちに気付いたため難なく避けるがその時にはもう懐に入り込み、腹に向かつて掌底を繰り出す。

鎧が碎け猿が仲間にぶつかりながら飛んでいく。するとギルドカードが光った。

ランクが上がる経験値がたまったみたいだ。が確認してる暇などなく、ほかの武装した猿達に対応する。

斧を戻そうと思うが魔法を使うのをアル意外に見せて騒ぎになりたくないので素手で対応する。

振ってきた剣を横にずれてかわし体当たりをする。俺の身体能力せいで、猿は後ろにいた仲間ごとはじけ飛んでいく。

そうしてほかの猿も剣をかわして体当たり、隙があればぶん殴るを繰り返していく。

剣が当たっても剣が碎けていくため、途中からは剣を無視して体当たりしていった。

しばらくして人を襲っていた猿をすべて倒した。つてこいつ気絶してやがる。

血がいつぱい出てるし結構やばい状態なのか？

まあ、助けたしもう行つていいかな？

ランクもEに上がってるし。

「おい。大丈夫かー！」

ん。さっき無視したおっさんじゃないか。それに、19階で立ち止まっていた野郎だ。

「はあはあ。お前さんは大丈夫みたいだな。そっちは……血が結構出てるが手当をすれば大丈夫だな。おいソルンこいつの手当てし

てやってくれ」

今のうちにいなくなっていいいかな？

斧を回収したりしていると気絶してた奴が目を覚ましたので話を聞くと、襲われていたのはイニヤって名前らしい。

階段の前にいたソルンと兄妹で一緒におっさん、アルバの弟子をしていたらしい。

ところがいつまでたっても20階に連れてってもらえなかったらしく、こっそり夜中に来たらしい。

おっさんは夜、酒を飲み酒場に行ったところ二人らしき人が出かけたと聞いて二人の部屋に行き二人がダンジョンに向かったのを確信し探しにきたそうだ。

「いやー、お前さん強いな。ここの階は急に敵が強くなるから挫折する奴が多いんだが。こいつらは帰ったらお仕置きだな」

「ああ、そうですか。お仕置きはきつめにお願ひします」

きつめにお願ひした瞬間の二人の顔がすごいことになってたが知らん。

俺に面倒なことをさせた罰だ。せつかく人を避けてきてたのに。

「じゃあ、もう俺は行きますんで。さようなら」

「おう、今度出会ったとき、食事でも奢るぜ」

出会いたくねえ。

地下21階

転送の式を見つけ『転送』する。

そして11階に到達しもう一度『転送』をする。

ふう。もう朝日が昇り始めてるや。

素材換金して飯食って寝よ。朝晩逆転してしまっただが、別にいいやそのうち修正しよ。

換金は銀貨70枚と銅貨35枚だった。

飯はおいしかったが朝ようなので少し脂分が物足りなかった。

ランクがE。順調に進んでいる。アルが返ってくるまでに上級になってるんじゃないかというほどの成長ぶり。

まあ、魔法の恩恵が良すぎるだけだけど。

まあいいや。寝よ。また明日がんばろー。

異世界でランクあげ（後書き）

何か誤字脱字などがあればご指摘ください。

あとつまらないところなども教えてくださると恐縮です。

異世界で人付き合い

ああ、よく寝た。ん？ 太陽の位置が戻ってる？

次の日か。また寝過ぎしまった。まあいいや、生活リズムちゃんとなってよかったと思う。

……飯でも食いに行くか。

うつわ、すげえ混んでる。というか、うるせえ。ちゃんとした時間にご飯食べようとしたらこんな悲惨なのか。アリの巣みたいだ。もういいや、ダンジョン内でこっそり錬金して食べよ。

「あつダンジョンで助けてくれた人なんだよ」

おお。なんでいるんだ？ いや、居てもおかしくないのか。

イニヤだっけ？ 彼女には悪いがここは気付かなかったふりしておこ。人ごみ嫌い。

入口付近で止まってよかった。これが奥のほうに座った後だったら絶体絶命だった。

「ちょ、待って、名前だけでも教えるんだよ」

ふう。これだけ混んでてうるさいんだ。聞こえないこともある。

「じゃあ21階から挑戦……？ 11階までしか行けんのか。説明でもそんなこと言ってたな。なんでだ？」

説明の時、理由いつてたっけ？ まあいいや、20階の敵急に強くなつたし肩慣らしにはちょうどいいか。3歩進んで2歩下がる方式、安全？ だな。

地下22階

ここまで来る途中、何にもなかった。まあ俺には肩慣らしとか関係ないしな。ミスる度に強く？ なるし。

まあこの階からDランクいわゆる中級に入るわけだからすこし気を付けますか。

「おーい、昨日の人ー」

ああ……やる気が下がった。アルとはいろんなことがあったせいで一緒にいても何とも思わなかったが、本来俺は他人と話をしたり行動したりするのが苦手なんだ。

「済まないんだが、ちょっとこいつら二人を連れてダンジョンを進んでくれないか？ もちろん俺も護衛としてついていくが」

なぜに？ お前の弟子なんだから自分で鍛えろよ。それに昨日死にかけてたろ。もっと浅いところで訓練すれよ。

「あー、アルダさん？ なぜあなたの弟子を連れて行かなきゃならんのですか？」

「アルバだ、理由は他人とのコンビネーションを教えたいからだ。敵がかなり強いが俺は何とかなるしあんたも昨日のを見る限りかなりの腕がありそうだからな。そして強い敵を倒す経験もさせれるつてのが決め手だな」

こいつ何言つてんの？ まあ壁役にはなれるが……だがあんま関わりたくないし。それに弟子には聞いたのかよ。まあ聞かなくても朝のことを考えると聞かなくてもわかるな。

「あー、基本俺のペースに合わすこと、攻撃は防いでやるからお前らが攻撃すること。めんどくなったらおいて行ってもいいこと。これが守れるならいいよ」

「うむ。最後の条件は最悪だが俺一人でもここのやつらは倒せるしな。よし。交渉成立だ。急な頼みを聞いてくれてありがとう。ほら、お前らも」

「恩人さん？ ありがとなんだよ」

「昨日は妹を助けてくれてありがとうございました。今日も急な頼みを聞いてくれてありがとうございます。これからよろしくお願いします」

恩人さんはなかなか気分がいいな。だが若干恥ずかしい。名前ぐらいは教えとくか。あとは戦い方を聞くのと役割だな。まあ攻撃役と壁役は決まっているが。

「俺の名前はノルだ。それとお前らの攻撃方法、アルバさんの護衛は何をするのか教えとくれ」

「僕は短剣による連撃と魔術による補助がメインですね」

「私は魔法による攻撃で完全な後衛向きなんだよ」

「護衛は基本敵の探索と死なないように守ることだな。手は出さないが危なくなったら守ってやる。あと私は大剣でのごり押しが得意だ」

ふむ。前衛3人に後衛1人が、偏ってるな。まあアルバのおっさんは危なくなるまで手を出さないらしいしソルン？ は補助魔術使えるから大丈夫か。

「じゃあ敵をアルバさんが見つけて教える。それを場合によって倒したり無視して進んでいく。戦いになったら俺は壁に徹する。ソルンは自分に補助かけて攻撃。イニヤは後ろから魔法で攻撃。でいいな？」

「了解だ」

「了解です」

「了解なんだよ」

ふう。疲れた、知り合い3人の中に他人1人とか拷問だ。まあ、子供らには好かれてるからいいか。まあ自分も子供……いやまてよ異世界基準では大人なのか？ まあいいや向こうは小学生くらいだし。

ソルンのほうは活発そうな子って感じの見た目だな。茶髪でツン

ツンヘアーだからかな？ 服装も軽装で鎧とか着てないし。だが礼儀正しいと。

イニヤはフード付きのローブ？ を着ている。かぶっているフードなかに色素の抜けたような感じの白い髪が見えている。性格はお転婆っぽい気がする。

そういえば魔法を使うと言っていたがどんなのを使うんだ？ 発動に時間がかかるから戦闘には向かないってアルがいったのに。

「おい、敵発見だ。その奥に階段もあるのが見えるからこいつは倒すべきだな」

「わかった。俺の壁のすごさ、しかと目に焼き付けるがいい」

「はい。『障壁』『加速』よし。こっちは準備終わりました。いつでもいけます」

「私もいつでもいいんだよ」

「じゃあ初戦闘がんばりますか」

この子達意外と強い。猿に負けてたはずなのに。今の相手はでっかいトカゲ。まあ猿見たくすばしっこくないし。相性もあるか。

ソルンは敵に張り付き、短剣に薄くした障壁を張り、切れ味を上げそれを加速した身体能力で切り込んでいく。

「『凍れ』『吹き付けろ』なんだよ」

イニヤは敵を部分的に凍りつかせ風？ の塊をぶつけて碎いていく。しかも体温を奪ったり強風で行動を阻害できるのでソルンと相

性がばつちり。ソルンは障壁があるので風の影響受けてない。

ぶつちやけ俺いらな子。敵の動きが遅いから二人ともちゃんとかわせるし攻撃も大振りだし。

「なあなあイニヤよ、なんでそんなに魔法連発できるの？ 不思議で不思議でたまんない」

「それは加護があるからなんだよ」

「わかったなんだよ」

「真似はダメなんだよ」

加護か。あとでギルドカード見せてもらうか。

「ふう。おわりましたよ。あとは剥ぎ取るだけですな」

戦闘終わってるし。他人とのコンビネーションの練習？ なにそれおいしいのって感じだな。だが兄妹のコンビネーションはいいな。

「よし、ペースを上げるからなーおいてくぞー」

地下30階

とうとうボスの部屋へ到着。今思ったけど猿の部屋行かせてもらえてなかったソルンとイニヤは一気に2ランクアップだな。

それに敵がでっかいトカゲしか出てきてないから俺いらなこのまんまだわ。

「敵発見だ。気を抜くなよ。ボスは格別だからな。1回猿にやられていることをわすれるな」

敵はでつかいトカゲが少し小さくなつて引き締まった感じ。見た目弱そう。

「おおうつ　ちょ、速つ、動きがきもい、お前ら気をつけろ」

トカゲめ。動きがクソ速い。少し小さくなっているがパワーも増している。やつと壁の出番だな。

「イニヤっ俺に当てるなよ。それとソルンっ敵についていけるか？」

「あてないんだよ」

「ダメです。追いつけません」

「追いつく方法考えろ。あとイニヤは相手の動きを抑えるかわされても当たるでかいのうってやれ。俺に当てないで」

「『氷河』なんだよ」

おお目の前に大量の水が出て敵を押し流したかと思ったら凍りついた。

自分のほうには水は来ず敵のほうに向かって流れだしたおかげで俺には当たっていない。すげえな。

「ソルンとどめさして来い」

「はいっ」

あ、凍つてて短剣じゃ敵まで刃がとどいていない。っていうかなんでこんな強力なの使えて猿に負けたんだよ。

「そうだ。ノルさん何かいいアイデアありませんか？」

「加速できて障壁張れるんだったら突撃しかないだろ」

「師匠は何かアイデアないですか」

「お前らあんま連携してないな。まあいいか。こういう時はでかい武器を使うとか砕くとかだな。まあとどめはお前がさすから困っているわけだがイニヤの魔法で粉碎つてのが楽だな」

「砕くですか。それに突撃……わかりました、やってみます」

ソルのやつほんとにやるのか。ノリで言ったのに。まあ成功したらいいな。

「『障壁』 『障壁』 『加速』 『加速』」

ん？ なんだ今のかなりの速さでぶった切っただと。

切れ味を上げるために張っていた障壁を伸ばしロングソードぐらいにし加速の2度掛けで突っ込んだのか。そして自分の周りに張って高速移動の衝撃を消したのか。

「やりましたっ。見えましたが今のっ僕の新しい技ですね！」

「高速で敵の前行きスピードと薄い障壁で敵をぶった切るか。かつこいいな」

「ありがとうございます」

いいな俺もなんか考えよ。力任せに振るか自爆しかできないし。あとはショットガンの連射ぐらい。力任せすぎる。

うーん。まあいいか別に。

「じゃあさつさとあと9匹倒しますか」

残りはすぐに片付いた。ソルンが真つ二つにし、イニヤが凍らし砕く。俺は奇襲しようとしているのを叩き切る。アルバさん空気。

「よっしゃ。Dランクになった。中級になったしアルと組めるな」

「アルさんって誰ですか？」

「知り合い」

「そうですか……すみませんが僕たちも組むときに入れてくれませんか。いいですよね師匠」

「俺はおまえらがまだまだ心配だが……ノルがいいというならいいぞ。安心して任せられる」

うーむ。どうしたものか、こいつらなかなか強いしな。アルにあったら相談するか。

「チームを作るとき相談してみるよ。んで入るとしたら誰が入るんだ？」

「僕は入りたいです」

「私も入りたいんだよ」

「俺は遠慮しておくな」

アルバのおっさんは入らないのか。まあ入れると決まったわけじゃないしな。

「じゃ、聞いとくよ今日はもう此处で解散しよう」

「わかりました。さようならー」

「さよならなんだよ」

「じゃあな」

俺は31階で転送しギルドに戻った。

「あ、最後のトカゲ剥ぎ取ってねえ。まあいいか」

よし。あと2〜3日でアルが戻ってくるはずだし中級に上がったから少し技を考えたりして過ごそう。

それにしても人付き合いが苦手だったがうまくいきそうだ。

今日はもう精神的に疲れたし寝るかな。

明日は技開発だ。がんばるぞー！。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9960w/>

神隠しで異世界に

2011年11月13日06時05分発行